Voice ヴォイス 第7号

大分県立芸術文化短期大学　サービスラーニング公式新聞
第7号／発行2011年9月18日

今、この場所で私たちにできること

あしながが学生募金 ～東日本大震災遺児支援募金～

アースデイおおいた2011

第2回府内学生Ecoフェスタ ～学生が真剣に考える!? 府内5番街の未来予想図～

その他サービスラーニング ～地域密着☆Let's! 地域♡愛～

「あしなが学生募金」

東日本大震災
あしながが学生募金

4月23日(土)、私たちはあしなが学生募金に参加した。あしなが学生募金とは、ＮＰＯ法人「あしなが育英会」が行っている活動である。主に災害や病気、自殺などで親を失った学生、あるいは重度後遺障がい者の親をもつ学生の学業継続を支援するための募金活動をしている。

今回は、3月11日に起きた東日本大震災への支援を目的とした「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」を行った。あしなが育英会の調査では東日本大震災で親が亡くなるか行方不明になった震災遺児世帯のうち、およそ半数が母子家庭で、両親ともいない家庭も19%に上る事がわかった。また子供たちを支える保護者が、19歳から90歳まで幅広い年代にわたっている事も判明している。

23日は、私たちの他にもＡＰＵの学生や、市内の高校生も参加した。この活動の目的をたくさんの人が理解し、募金をしてくれてとても嬉しかった。募金をしてくれた人は小さい子供から年配の方まで様々な人がいた。また、募金活動を行っている時に「頑張ってください」と声をかけてもらい、この活動にやりがいを感じた。中には、一度は通り過ぎていったけれど戻ってきて募金をしてくれる方や、「少ししかない」と言いながらも財布のお金を全額寄付してくれた方などがいた。人の優しさや温もりを感じ、人と人との繋がりの深さを改めて実感する事ができた。このようなたくさんの人の想いが、被災者の方々へ少しでも伝わり支えとなればいいと感じた。

written by　梶野 愛衣、岩尾 真美

（情報コミュニケーション学科 1年）

「アースデイおおいた2011」

アースデイおおいたが5月15日(日)別府市にある別府公園で行われた。本学からは26人がボランティアとして参加した。アースデイとは地球を思って行動する日で、今年のテーマは『わたしにできること・みんなでできること』だった。

今年は原爆の残り火を由布院から歩いて運んでいたので、その火を囲んで自然や平和についての話をした。他にも、環境クイズラリーや無農薬野菜にこだわった飲食店、環境に関するワークショップがあった。アースデイトークに参加し、様々な世代の話を聞いて環境問題などについて考えることができた。

written by 梶原 愛理

(情報コミュニケーション学科 1年)

「第2回 府内学生ECOフェスタ」

13:00～ 「ミニFM放送局」

私は13時より行われたミニFM放送局『白熊ラジオ』のパーソナリティを担当した。これまで本学が携わってきたサービスラーニングについて各担当ごとにわかれラジオ番組形式で情報発信をした。この活動では、Ustreamでも学生の活動を生配信し、視聴者の声も実際に聞くことができるものだった。全世界に自分の声が配信されたと思うととても恥ずかしいが、良い経験になった。情報発信について改めて学ばされた1日だった。

written by 髙橋 愛実

(情報コミュニケーション学科 1年)

14:30～ 「シンポジウム」

私はシンポジウムスタッフとして参加した。シンポジウムは、本学で実施したアンケート結果をふまえて府内町の活性化のために何ができるかを大学生と府内の方々で議論した。府内についてもっと多くの人に知ってもらうことが課題だと感じた。

written by 梶原 愛理

(情報コミュニケーション学科 1年)

17:00～ 「ウッドデッキ」

私はウッドデッキコンサートの司会を担当させてもらった。芸文短大の手話サークルやダンスサークルをはじめとする全5組がパフォーマンスをした。司会ということで緊張していたが大きな失敗はなく次の司会へ繋ぐことができた。しかしアドリブでその場を盛り上げることができなかったことが心残りである。

written by 新納 恵理加

(情報コミュニケーション学科 1年)

前期 その他 サービスラーニング

4月

「第3回 別府八湯日韓次世代交流映画祭」

4月15日(金)から3日間、ビーコンプラザや別府市中央公民館などの4つの会場で『第3回 日韓次世代交流映画祭』が行われた。ゲストとしてチャン・フン監督や俳優のコ・スさんらが舞台上に登場し、観客からの声援に応えた。期間中は『義兄弟』や『デュエリスト』などの映画が上映され、韓流ファンならずとも楽しむことができた。今回で3回目ということもあり、県内外から多くの方が訪れていた。いま日本で韓流ブームが起きているのは日本人にも受け入れやすい表現が、韓国の作品に多く使われているからだと、今回の映画祭を通して感じた。

written by 大久保 美紀、新納 恵理加
（情報コミュニケーション学科 1年）

4月

「TOSみどり森・守財団 森づくり植樹祭」

4月17日(日)、TOSみどり森・守財団森づくり植樹祭が湯布院町倉木山で開催された。この植樹祭は豊かで美しい森を育てるため毎年行われている。今年は210人(本学からは36人)が参加し、ヤマザクラやヤマモミジ、ケヤキを植えた。昼からは湯布院まちなか研修を行った。朝、バスの中でビデオを見て湯布院のまちづくりについて勉強した。ビデオを見て受けた印象は"温泉と緑のある静かなまち"であるということだった。しかし、実際に歩いた湯の坪街道は人がたくさん居てにぎやかだったので湯布院には2つの面があるのではないかと感じた。

written by 梶原 愛理、髙橋 愛実
（情報コミュニケーション学科 1年）

4月

「おおいた上野の森の会」

4月24日(日)に、上野の森の活動が行われた。今回の活動には上野の森の会の方と本学の学生9名、引率の教員とお子さんで活動をした。

活動内容は、除草作業とゴミ拾いだった。途中、主催者のお話を聞く機会もあり、約1時間、上野の森を歩いた。作業が終わると山菜の天ぷらを振舞って頂いた。どれも揚げたてで、とても美味しかった。

今回の参加で、こんなに身近に森があることを知り、自然と触れ合う事ができた。毎月1回実施されているので積極的に参加していきたい。

written by 大久保 美紀
（情報コミュニケーション学科 1年）

5月

「 遊 花 祭 」

5月8日(日)、日田市五馬市(いつまいち)の農業公園「ローズヒルあまがせ」で遊花祭が行われた。

天瀬グリーンツーリズム研究会の方の協力のもと、本学からは学生26名が参加し、天ケ瀬の自然について学んだ。また、子供向けスペースの運営によって、人とのコミュニケーションの大切さを知ることができた。

遊花祭に参加したことで、自然に触れ合うことと多くの来場者の笑顔をみることができた。

written by 髙橋 愛実
（情報コミュニケーション学科 1年）

6月

「テオ・ヤンセン展 ストランド・ビーストづくり」

6月12日(日)より行われているストランド・ビーストづくりが7月19日(月)に本学にて終了した。

この活動は、大分市美術館で行われているテオ・ヤンセン展事務局の依頼により吉岡孝准教授と狩谷新助教の指導のもと、大分工業高等専門学校(以下高専)を借りて学生20名が制作した。

本学の他にも高専及び県内の高校4校も独自に制作している。本学で完成したものは、鶴崎二十三夜祭で初披露された。

written by 髙橋 愛実
（情報コミュニケーション学科 1年）

7月

「第38回 清正公二十三夜祭歩行者天国」

7月23日(土)、鶴崎商工会議所前の国道197号線にて「清正公二十三夜祭」が行われた。例年はＳＡＥＭＯＮ２３という踊りのイベントをしていたが、今年は初めての試みで国道１ＢＡＮと称したレースを行い、足の速さを競った。本学の学生らは3つの班に分かれて活動した。ＰＲ事業班は浴衣競歩リレー、エコステーション班はゴミの回収、ワークショップ班はストラックアウトなどの体験ブースの企画運営を行った。今回初めて二十三夜祭に携わらせてもらったが、鶴崎の方々の地元愛が伝わってくるイベントだと感じた。

written by 岩尾 真美、梶野 愛衣、新納 恵理加
（情報コミュニケーション学科 1年）

学長プロジェクト

テオ・ヤンセン氏と語る

「未来への対話－テオ・ヤンセン学生と語る－」突撃インタビュー

—大分県を訪れてどういった印象を受けましたか？

とても優しい人たちばかりだと思ったよ。食事に行ったときに特注で小麦のパンを作ってくれたり、ワインをいただいたりしてね。こちらが興味を持つとすぐにその物をくれるから、逆に申し訳なく思ってしまったよ。

—ストランド・ビーストのそれぞれの名前の由来は何ですか？

名前を付けるときは、ラテン語の辞書を引いてその作品に合ったものをつけるんだ。シアメシスは双子という意味があるんだよ。

—ビーストを作る前はＵＦＯも作ったそうですが、難しかったですか？

とても難しかったよ。小さいものから作っていったけど、大きいものになると飛ばなかったんだ。３つ目はうまく飛んだけど、４つ目は高く飛びすぎて大変だったよ。あとは、平行に飛ばすことにとても苦労したね。

—そんなテオさんのモットーは？

モットーといわれると難しいね。僕がビーストを作る時は、チューブが自分に指示をしてくれるんだ。そのあとはいかにリアリティーのある生命を作るか。作る時はいつも危険と隣り合わせだし、よくけがをするけどそれは気にならないよ。僕はこのことに関しては中毒なんだ（笑）

私たちのぎこちない英語の質問に対しても気さくに答えてくださったテオ・ヤンセン氏。緊張していると笑わせてくれるとても素敵な人だと思った。
9月30日まで大分市美術館で開催しているテオ・ヤンセン展にも実際に足を運びたいと思う。

７月１１日（月）本学で行われた学長プロジェクト「未来への対話－テオ・ヤンセン学生と語る－」。Ｖｏｉｃｅ編集部は講義後、テオ・ヤンセン氏に直接話をお伺いすることができた。

written by 髙橋 愛実、梶原 愛理、新納 恵理加（情報コミュニケーション学科 1年）

Last Chorus♪ ～編集後記～

全ての記事を読んでもらうにはどうしたら良いのかという点で、構成を考えていくことが想像以上に大変だった。
新納 恵理加（情報コミュニケーション学科 1年）

私は今回、Voiceの制作をしてみてとても楽しかった。自分たちのしてきた活動を情報として発信出来る楽しさを感じる事が出来た。
梶野 愛衣（情報コミュニケーション学科 1年）

6人という少人数での作成となり大変でしたが、とても充実した時間を過ごすことができました。
大久保 美紀（情報コミュニケーション学科 1年）

初めて編集という作業をした。文字数が決まっていて、その決まっている文字数で文をまとめるというのはとても難しかった。
岩尾 真美（情報コミュニケーション学科 1年）

Voiceを作成するにあたって大変だったのは、何回も文章を練り直したことだ。これで少しでも文章力が身についていればなと思う。
梶原 愛理（情報コミュニケーション学科 1年）

テオ・ヤンセンさんに直接インタビューできたことがとてもいい経験になった。編集は思った以上に大変な作業だった。
髙橋 愛実（情報コミュニケーション学科 1年）

Voice
ヴォイス
大分県立芸術文化短期大学 サービスラーニング公式新聞
〒870-0833　大分市上野丘東1番11号　大分県立芸術文化短期大学
tel.097-545-0542（代表）／fax.097-545-0543
Voice 第7号　2011年9月発行